

古本説話集の「けり」のテキスト機能

——「にけり」「係り結び」の終結機能——

藤 井 俊 博

一 問題の所在

これまで筆者は、拙稿(二〇一〇)(二〇一一)(二〇一二)(以下「前稿」とする)で今昔物語集と宇治拾遺物語を取り上げ、「けり」が話の冒頭部と終局部・評語部に多く用いられて、梓づけのテキスト機能をもつ場合があることを明らかにした。大きな傾向としては、今昔物語集においては天竺・震旦部・本朝・仏法部などで「けり」で梓を作り、展開部が「非けり」となる典型例が多く見られる。宇治拾遺物語では、典型的な梓構造をなさない例も多く、展開部において文中に「ける」「けれ」が用いられる傾向がある。しかし、宇治拾遺物語においても、冒頭部や終局部において係り結び・連体形終止や「にけり」などの強調的な表現を用いて、なお「けり」による梓組みを保とうとする傾向があることを述べた。

これらを承け、本稿では古本説話集における「けり」のテキスト機能について検討する。古本説話集は、今昔物語集や宇治拾遺物語との類話を含んでおり、これら三書は、宇治大納言物語を共通祖本とする説話群とされている。古本説話集は、主に和歌説話を集めた上巻(一話〜四六話)と、仏教説話を集めた下巻(四七話〜七〇話)に分かれる。これらの話柄の違いによって、文章構成の違いも見られる。上巻の和歌説話では、歌物語的な内容が中心であり、和歌の提示により説話の終結となる場合が多い。下巻の仏教説話は物語の標準的な構成になる傾向が強く、古本説話集の「けり」の使用傾向を検討するに際しては、これら上・下巻の差異を勘案する必要がある。このような点を踏まえつつ、本稿では、「けり」の終結機能を中心に、係り結び・連体形終止文・「にけり」「てけり」を考察する。なお、古本説話集の本文は新日本古典文学大系本による。

K	冒頭部と展開部に用いるもの	1話 (4話)
L	展開部と終局部に用いるもの	0話 (1話)
M	展開部と評語部に用いるもの	0話 (1話)
N	展開部と終局部と評語部に用いるもの	1話 (2話)
O	展開部にのみ用いるもの	0話 (2話)
(三)	一話のうちに「けり」を用いないもの	総計 5話 (7話)

古本説話集では、冒頭部と終局部・評語部で枠を作る(一)の型には文末用法のみで文中用法が見られない枠構造の例が4例見られる。しかし、これらはいずれも短小な和歌説話の例であり、ある程度の長さの説話では、展開部にも文中用法をも全く用いない、完全な枠構造をとる説話は一例も見られないのである。典型例に近い例として、文中用法が展開部に用いられるものの、「けり」の文末用法が冒頭部・終局部にのみ偏って見られるものが少数見られる。まず、冒頭部と終局部に文末の「けり」を用いたBの例を挙げておく。

【例1】今は昔、丹後の国は北国にて、雪深く、風けわしく侍山寺に、観音験じ給。そこに貧しき修行者籠りにけり。冬のことにて、高き山なれば、雪いと深し。これにより、おぼろけならずは人通ふべからず。この法師、糧絶へて日来経るまゝに、食ふべき物なし。雪消えたらばこそ出でて乞食をもせめ、人を知りならばこそ「訪へ」と言はめ、雪の中なれ

ば、本草の葉だに食ふべき物もなし。五六日請ひ念ずれば、十日ばかりになり、ければ、力もなく、起き上がるべき心地もせず。寺の辰巳の隅に破れたる蓑うち敷きて、木もえ拾はねば、火もえ焚かず、寺は荒れたれば、風もたまらず、雪も障らず、いとわりなきに、つくづくと臥せり。物のみ欲しく、経も読まれず、念仏だにせられず。たゞ今を念じて、「今しばしありて、物は出で来なん、人は訪ひてん」と思はばこそあらめ、心細き事限りなし。今は死ぬるを限りにて、心細きまゝに、「この寺の観音、頼みてこそは、かゝる雪の下、山の中にも臥せれ、たゞひとたに声を高くして「南無観音」と申すに、もろくの願ひみな満ちぬることなり。年来仏を頼み奉りて、この身いと悲し。日来観音に心ざしを一つにして頼み奉るしるしに、今は死に侍なんす。同じき死にを、仏を頼み奉りたらむばかりには、終りをまたしかに乱れずとりもやするとて、この世には、今さらにはかくしき事あらじとは思ながら、かくし歩き侍。などか助け給ざらん。高き位を求め、重き宝を求めばこそあらめ、たゞ今日食べて、命生くばかりの物を求めて賜べ」と申程に、戌亥の隅の荒れたるに、狼に追はれたる鹿入り来て、倒れて死ぬ。

こゝにこの法師、「観音の賜びたるなむめり」と、「食ひや

せまし」と思へども、「年来仏を頼みて行ふこと、やうく年積りにたり。いかでかこれをにわかにな食わん。聞けば、生き物みな前の世の父母也。我物欲しといひながら、親の肉を屠りて食はん。物の肉を食ふ人は、仏の種を絶ちて、地獄に入る道也。よろづの鳥けだ物も、見ては逃げ走り、怖ぢ騒ぐ。菩薩も遠ざかり給べし」と思ども、この世の人の悲しきことは、後の罪もおぼえず、たゞ今生きたる程の堪へがたさに堪へかねて、刀を抜きて、左右の股の肉を切り取りて、鍋に入れて煮食ひつ。その味はひの甘きこと限りなし。

さて、物の欲しさも失せぬ。力も付きて人心地おほゆ。

「あさましきわざをもしつるかな」と思て、泣くくゝゐたる程に、人々あまた来る音す。聞けば、「この寺に籠りたりし聖はいかになり給にけん。人通ひだる跡もなし。参り物もあらし。人気なきは、もし死に給にけるか」と、口々に言ふ音す。「この肉を食ひだる跡をいかでひき隠さん」など思へど、すべき方なし。「又食ひ残して鍋にあるも見苦し」など田心程に、人々入り来ぬ。

「いかにしてか日来おはしつる」など、廻りを見れば、鍋に檜の切れを入れて煮食ひたり。「これは、食ひ物なしといひながら、木をいかなる人か食ふ」と言ひて、いみじくあは

れがるに、人々仏を見奉れば、左右の股を新しく彫り取りたり。「これは、この聖の食ひだるなり」とて、「いとあさましきわざし給へる聖かな。同じ木を切り食ふ物ならば、柱をも割り食ひてん物を。など仏を損ひ給けん」と言ふ。驚きて、この聖見奉れば、人人言ふがごとし。「さは、ありつる鹿は仏の験し給へるにこそ有けれ」と思ひて、ありつるやうを人々に語れば、あはれがり悲しみあひたりける程に、法師、泣く泣く仏の御前に参りて申。「もし仏のし給へることならば、もとの様にならせ給ね」と返々申ければ、人々見る前に、もとの様になり満ちにけり。

されば、この寺をば成合と申侍なり。観音の御しるし、これのみにおはしませず。

(下の五三)

この例では冒頭部と終局部において「にけり」が用いられ、杵をなしている。展開部や終局部の文中に「ける」「けれ」が一部見られるが、典型的な杵構造に近い例である。次に、冒頭部・終局部・評語部の文末に「けり」を用いるCの例を挙げる。

【例2】今は昔、大和の国に長者ありけり。家には山を築き、池を掘りて、いみじきことどもを尽くせり。門守りの女の子なりける童の、真福田丸といふありけり。

春、池のほとりに至りて、芹を摘みけるあひだに、この長

者のいつき姫君、出でて遊びけるを見るに、顔貌えもいはず。これを見てより後、この童、おほけなき心つきて、歎きわたれど、かくとだにほめかすべき便りもなかりければ、つゝあに病になりて、その事とかく臥したりければ、母怪しみて、その故をあながちに問ふに、童、ありのまゝに語る。すべてあるべきことならねば、わが子の死なんずる事を歎く程に、母も又病になりぬ。その時、この家の女房ども、この女の宿りに遊ぶとて、入りて見るに、二人の物病み臥せり。怪しみて問ふに、女の言ふやう、「させる病にはあらず。しかしかのこと八侍を、思ひ歎くによりて、親子死なんとするなり」と言ふ。女房笑ひて、このよしを姫君に語れば、あはれがりて、「やすき事也。早く病をやめよ」と言ひければ、童も親もかしこまりて、喜びて、起き上がりて、物食ひなどして元のやうになりぬ。

姫君言ふやう、「忍びて文など通はさむに、手書かざらん、口惜し。手習ふべし」。童喜びて、一二日に習ひ取りつ。またいはく、「わが父だ、死なむこと近し。その後、何事をも沙汰せさすべきに、文字習はがらん、わろし。学問すべし」。童、又学問して、物見明かす程になりぬ。又いはく、「忍びて通はんに、童、見苦し。法師になるべし」。すなはちなり

ぬ。又いはく、「その事となき法師の近づかん、怪し。心経、大般若など誦かべし。祈りせさするやうにもてなさん」と言ふに、言ふに従ひて誦みつ。又言はく、「なを、いさ、か修行せよ。御しんするやうにて近づくべし」と言へば、又修行に出で立つ。姫君あはれみて、藤袴を調じて取らす。片袴をば、姫君身づから縫いつ。これを弱て修行し歩く程に、この姫君、はかなく煩ひて失せにけり。

かくし廻りて、いつしかと帰りたるに、「姫君失せにけり」と聞くに、悲しきこと限りなし。それより道心深く発りければ、とろろぐ行ひ歩いて、貴き上人にてぞをはしける。名をば智光とて申ける。つゝに往生してけり。

あとに弟子ども、後の業に、行基菩薩を導師に誦し奉りけるに、礼盤に上りて、「真福田丸が藤袴、我ぞ縫いし片袴」と言ひて、異事も言はで下り給にけり。弟子ども怪しみて、問ひ奉りければ、「亡者智光、かならず往生すべかりし人也。はからざるに惑ひに入りにかば、我、方便にて、かくは誘へたる也」とこそたまひけれ。

行基菩薩、この智光を導かんがために、仮に長者の娘と生れ給へる也けり。行基菩薩は文殊なり。真福田丸は智光が童名なり。されば、かく、仏、菩薩も、男女となりてこそ道ひ

き給けれ。

(下の六〇)

この例では、展開部に文末用法の「けり」が用いられないが、冒頭部に「ありけり」があり、終局部に「にけり」（失せにけり）があり、その後の評語部に、「ける（連体形終止）」「ぞける・こそけれ（係り結び）」「てけり」「にけり」「なりけり」が用いられている。ただし展開部には、3例の「ければ」が見られるが、このような文を繋ぐ用法の「ければ」は切れ目を作りにくく、文を切る用法である文末用法の方が枠を形成する用法と見ることができ^①。このように、右の例でも「にけり」や係り結びが枠構造の形成に関わることが指摘できる。

古本説話集では、右のような枠構造の例も見られるが、それよりは(二)のように展開部にも文末の「けり」がある例がI・Jの話を中心に見られ、(一)の倍以上の用例が見られる。これらは文中用法を展開部に含んでいる例も多く、古本説話集全体としては、枠構造をとる意識は今昔物語集などに比べて希薄な印象を受ける。しかし、これらの例にも枠に関わる特徴は認められる。次に冒頭部、展開部・終局部・評語部の文末に「けり」をとるJの例を挙げる。

【例3】今は昔、人の女の幼かりける、継母にあひて、憎まれて、わびしげにて有けり。継母、我方に人のもとより、讚岐の小鍋を多く得て、前にとり並べて、見沙汰しけるを、この

古本説話集の「けり」のテキスト機能

子に「もとらせざりけり」「心憂し」と思ひて、南面の人もなき方に出でて、うち泣きてながめられたれば、鶯、同じ心にいみじく鳴きければ、

鶯よなどは鳴くぞ乳やほしき牛鍋やほしき母や恋しきとぞ詠みたりける。

容貌、心ばへもうつかりけれども、継母になりぬれば、かく憎みける也。

(上の二六)

和歌説話は、右のような短小な話が多く、冒頭部と展開部と終局部の境界が明確ではないため、このように展開部に「けり」が用いられる例が多くなる。右の例では、冒頭第一文が「わびしげにて有けり」で始まる。続く文の末尾「とらせざりけり」は冒頭部でいきさつを述べる「行跡」とも展開部の一部ともとられる。分類上は展開部と終局部を兼ねた文が「ぞ詠みたりける」の文であるためJに分類したものである。この例では展開部の和歌が話のクライマックスであり、それを承けた終局部の叙述が「ぞける」で締め括られ、叙述の切れ目を明示している。これに続く解説の評語部に「ける也」と叙述され、内容が区別される。また、次の例、

【例4】今は昔、この四五年ばかりの程のことなるべし、人の許に宮仕へしてある生侍ありけり。することのなきまゝに、清水に人真似して、千度詣で二度ぞしたりける。

其後いくばくもなく、主の許にありける同じやうなる侍と、双六を打ち合ひにけり。おほく負けて、渡すべき物なかりけるを、いたく責めければ、思ひわびて、「わが持たる物なし。たゞ今貯へたる物としては、清水に二千度参りたることのみなんある。それを渡さん」と言ひければ、傍にて聞く人々は、「うち謀るなり」と、烏諍に思ひて笑ひけるを、この打ち敵の侍、「いとよきこと也。渡さば得ん」と言ひければ、この負け侍、「さは、渡す」と、微笑みて言ひければ、「いな、かくては受け取らじ。三日して、このよし申て、をのれに渡すよしの文書きて渡さばこそ、受け取らめ」と言ひければ、「よきことなり」と契りて、その日より精進して、三日といひける日、「さは、いざ清水へ」と言ひければ、この負け侍、「烏諍の痴れ者に会ひたり」と思ひて、よるこびて参りにけり。言ひけるまゝに文書きて、御前にて、師の僧呼びて、事の由申させて、「二千度参りつること、それがしに双六に打ち入れつ」と書きて、取らせたりければ、受け取り、よるこびて、伏し拝みて、まかり出でにけり。

其の後、いく程もなくして、この打ち入れたる侍、思ひかけぬことにて捕へられて、獄にゐにけり。打ち取りたる侍は、思かけぬたよりある妻まうけて、いとよく徳つきて、司など

なりて、楽しくてぞ有ける。「目に見えぬものなれども、まことの心をいたして受け取りたりければ、仏、あはれとおほしめしたりけるなめり」とぞ人言ふなる。このある人のこと也。
(下の五七)

右の例では、冒頭部に「ありけり」と係り結びの「ぞしたりける」の例が見られる。展開部では、「打ち合ひにけり」ではじまり終局部が「参りにけり」「まかり出でにけり」で終わり「にけり」文が展開部の枠になっていると解される。「参りにけり」で終わる文は、長文の一文で展開部を構成しており、その中に「けるを」「ければ」「ける十名詞」の文中用法を含んでいる。さらに「ぬにけり」「ぞ有ける」の後日談が続く。「参りにけり」の文が展開部であるため、分類としては展開部に「けり」が含まれるJの例とした。

三 文章構造における「けり」の使用状況

前節で見たように、枠構造に関わる表現として「けり」のほか、「にけり」「ぞける」等が枠構造に関わる表現として指摘できた。ここでは文章の各要素ごとに、これらの表現の使用状況について、他作品と比較しつつ詳しく見おきたい。

まず、冒頭部の文末の「けり」の使用について述べる。ここで、古本説話集の各話の冒頭一文に着目すると、

【例5】今は昔、御荒の宣旨といふ人は、優にやさしく、容貌もめでたかりけり。
(上の八)

【例6】今は昔、西三条殿の若君、いみじき色好みにておはしましけり。
(下の五二)

のように、文末に「けり」の用いられた例数の総計は27例である。これは総話数70話の39%であり、宇治拾遺物語で総話数の59%であるのに比べると少ない値である。さらに、第一文の使用例のうち、例2に見られた「今は昔、大和の国に長者ありけり」や、

【例7】今は昔、五条わたりに、古宮原の御子、兵部の大輔なる人おはしけり。
(上の二八)

のような人物存在提示の文は19例・27%で、宇治拾遺物語の37%あるいは今昔物語集の54%よりは少ない。ただし、人物存在提示の文数は、宇治拾遺物語では第一文の「けり」使用の総数116話の62%であるのに対して、古本説話集では同総数28話の68%を占めていて、「けり」を採る場合に占める比率はやや高い。このように人物存在提示文をとる傾向は古本説話集では特に下巻において特徴的なものである。人物の存在提示文は、上巻の和歌を中心とした話には6例・13%にすぎないが、仏教説話の下巻では、13例・54%にもなる。なお、第一文の用法別では、「けり」28話「こそくけれ」1例「連体形終止」6話で、終止形の「けり」が多く用いられるが、「ぞく」

ける」「なむくける」の係り結びの例は見られない(ただし後述のように、冒頭部二文目以降には見られる。今昔物語集なども同様)。

次に、展開部に見られる文中用法の「ける」「けれ」「けり」について見ておく。古本説話集では展開部の文中に「ける」「けれ」が用いられる説話は55話・79%が見られる。これは、宇治拾遺物語の同80%とほぼ同じ比率である。例1・2に挙げたように、(一)のような枠構造を取る場合においても多くの説話にこれが見られる。これに対して、今昔物語集では、文中用法は天竺震旦部などでは用例が極限られており、本朝仏法部の後半部分から増え、特に本朝世俗部(巻二二・巻三二)においては多く見られる傾向である。和文的な文体の説話になるほど、「けり」の使用が完璧な枠構造にならず、続ける用法である文中用法が含まれる傾向が見られる。次に、終局部に用いられた「けり」の特徴について見ておく。終局部の文末表現を用例の多い順に示す。

和歌(22話)、「にけり」(12話)、「ける(係結)」(7話)、「けり」(6話)、「てけり」(4話)、「なし」(4話)、「ける(連体形終止)」(3話)、「動詞終止形」(2話)、「ぬ」(2話)、「けれ(係結)」(1話)、「動詞已然形」(1話)、「しか(き)」已然形・「ぞくしか」の係結」(1話)、「たり」(1話)、「けむ」(1話)、「なりけり」(1話)、「なり(断定)」(1話)、「る

るために、さらに段落冒頭・段落途中・段落末尾（ただし、終局部の段落は除く）に三分類し、これらが話のどの位置に用いているかを調査し、その内訳を示した。

（表一）

	ぞりける	なむりける	こそりけれ	連体形終止	合計
冒頭部	3	2	1	8	14
展開部段落冒頭	1	0	1	0	2
展開部段落途中	10	2	1	7	20
展開部段落末尾	3	2	0	0	5
終局部	5	2	2	3	12
評語部	11	5	3	9	28

表を見ると、文章の枠となる冒頭部、終局部、評語部の用例が54例で展開部に用いる27例の倍の例が見られる。特に評語部（後日談15例・解説11例・教訓1例・批評1例）と展開部途中に例が多い。

展開部途中に用いる例は枠を作る機能とは関わらない用法と見られるが、本書では用例が多く見られる。展開部途中の例を巻別に見ると、上巻に15例、下巻に5例である。このことは、上巻には段落を切る機能を含まない係り結びが多いことを示唆している。これに関連する事実として、上巻には、次のように展開部の係り結び・連体形終止文の連続使用の例が特徴的に見られる。

【例8】 …例は本院に帰らせ給て、人ぐに禄など賜はするを、

これは河原より出でさせ給ひしかば、思ひかけぬ事にて、さる御心設けもなかりければ、御前に召し有て、御対面させ給ひて、たてまつりたりける御小柱をぞ、被けたてまつらせ給ける。人道殿聞かせ給て、「いとをかしくもし給へるかな。禄なからんも便なく、取りにやりたらむもばど経ぬべければ、とりわき給へるさまをに兄せ給へる也。えせ物は、え思ひよらじかし」とぞ、殿は申させ給ひける。

後一条院・後朱雀院、まだ宮たちにて、幼くかばしましけるとき祭見せたてまつらせ給ばるに、御棧敷の前過ぎさせ給ばど、殿の御膝に、二所ながら据ゑたてまつらせ給て、「この宮たち見たてまつらせ給へ」と申させ給へば、御輿の帷より、赤色の御扇のつまをこそ差し出ださせ給たりけれ。殿をはじめまいらせて、「なを心ばせめでたくおはする院なりや。かゝるしるしを見せさせ給はずは、いかでか見たてまつらせ給ふとも知らまし」とぞ、感じたてまつらせ給ける。院より大殿に聞こえさせ給ける。

ひかり出づるあふひのかけを見てしかば年経にけるもうれしかりけり
（上の一）

【例9】 今は昔、元良の御子とて、いみじうをかしき人おはし

けり。通ひ給ところへに、

来やくと待つ夕暮と今はとて帰る朝といづれまされり
同じやうに書かせ給て、あまた所へ遣はしたりける。本院の
侍従の君のぞ、あるが中にをかしうおほされける。

夕暮は頼む心になくさめつ帰る朝は消ぬべき物を

(上の三五)

【例10】今は昔、小野宮殿の御子に、少将なる人おはしけり。

佐理の大式の親なり。はかなく煩ひて失せにければ、小野宮
殿、泣きこがれ給事限りなし。さて、忌み果て方になる程に、
この少将の御乳母の、陸奥国の守の妻になりて行きだりける
が、「若君かく失せ給へり」とも知らで、恋しくわびしきよ
しを書きて、馬たてまつりたりけるに添へて、御文まいらせ
たりける。返り事、小野宮殿ぞ書きてつかはしける。「その
人は、この程に、はかなく煩ひて失せにしかば、こゝには今
まで生きたることをなん、心憂くおほゆる」とばかり書きて、
歌をなん詠みてつかはしける。

まだ知らぬ人もありけり東路に我も行きてぞ過ぐべかり
ける

と書きてつかはしけるを見て、乳母、いかなる心地しけむ。

(上の四六)

その他、係り結びや連体形終止文が2文以上連続して使用される
箇所は、三五話・五〇話・五四話の例があるが、三五話と五〇話は
和歌説話的な内容である。

このような傾向の一方で、展開部でも段落末尾の例が見られる。

【例11】…そのをりの人、「なを、御門はかたことにおはしま

す物也。たゞ人はその大臣に逢ひて、さやうにすくよかに言
ひてむや」とぞ言ひける。

かくて、院失せさせ給て後、住む人もなくて、荒れゆきけ
るを、貫之、土左より上りて、まいりて見けるに、あはれに
おほえければ、ひとりごちける。

(上の二七)

【例12】…京童、谷を見下して、あさましかりて、立ち並みて
なん見下しける。

又、いつごろのことにかありけん、女の、児を抱きて、御
堂の前の谷をのぞきて立てる程に、いかにしたるにかありけ
ん、児を取り外して谷に落し入れつ。

(下の四九)

これらの段落末尾の例(その他、二八・五〇・六一)は、叙述を
区切る機能を持つており、枠機能に関わるものと考えられる。

和歌説話においては、地の文において語り手が前面に出る叙述法
を採りやすい。それらは、語り手が背景に退いて迫真的描写を展開
するのとは異なり、語り手が前面に出て行かう説的叙述法である

と見られる。上巻の和歌を中心とした文章では、例8・9・10のように、展開部や終局部等に和歌が提示される場合、それを解説する叙述の部分に係り結び・連体形終止文が多く用いられる。これらは「けり」の持つ解説的な意味をさらに強める用法と解される。また、例2「こそこのたまひけれ」「こそ道びき給けれ」、例4「楽しくてぞ有ける」のような下巻の後日談の例も、解説的な箇所例である。

これに対し、終局部や展開部の段落末尾に用いられる例は、解説強調の意味よりは、終結機能が發揮される場合である。小松英雄^⑤は、係り結びの本来の機能は、係助詞で叙述を切ることを予告し、結びで叙述の切れ目を作ることであると指摘している。文章論的な機能の解釈として興味深い指摘であるが、すべての例がその機能で説明できるのではなく、内容の切れ目に用いた時に發揮されやすい文章機能の一つとして捉えるべきであろう。

前稿で、今昔物語集や宇治拾遺物語では、展開部の中には文を「続ける」用法の「ける」「けれ」が含まれている場合、展開部を囲い込む冒頭部や終局部・評語部に文の流れを「切る」係り結びが用いられることで枠構造が保たれることを指摘した。終局部や評語部で終止形の「けり」よりも係り結びが用いられやすいのは、このような区切りの機能を持つためであろう。古本説話集においても、これと同様の文章構成の方法を窺うことができるのである。

五 「にけり」「てけり」の作る枠構造

前節で述べた係り結び・連体形終止文とともに、枠構造を作る表現として「にけり」「てけり」を挙げることができる。表二は、前節と同様に、話のどの位置に用いているかを調査したものである。巻別では「にけり」は上巻には20例、下巻には33例が見られ、下巻のような典型的な説話の文章構成に多く見られることがわかる。

(表二)

	冒頭部	展開部段落冒頭	展開部段落途中	展開部段落末尾	終局部	評語部
にけり	4	6	9	14	14	6
てけり	1	0	3	3	4	2
合計	5	6	12	17	18	8

表二によると、係り結びの例が多かった冒頭部と評語部には少なく、逆に係り結びの例が少なかった展開部段落末尾と終局部に用例が多い点特徴である。終局部の「にけり」の例は、例1・2・4のように枠構造の典型的な例を作る場合であった。展開部段落末尾の例にも、次のように終結機能に関わる例を挙げることができる。

【例13】 かく過ぐる間に、年月も過ぎにけり。

任果てての年、いつしか上らむとするに、常陸の守なる人の、はなやかなるあり。
(上の二八)

【例14】 すべき方もなかりけるま、に、「観音、助けさせ給へ」とて、長谷に参りて、御前にうつぶし臥して申けるやう、「この世にかくてあるべくは、やがてこの御前にて干死に死なん。又をのづからなる便りもあるべくは、そのよしの夢見がらん限りはまかり出づまじ」とて、うつぶし臥したりけるを、寺の僧見て、「こはいかなる物の、かくては候ぞ。物食ふ所見えず、かくてうつぶし臥したれば、寺のため穢らひ出で来て、大事なりなん。誰を師にはしたるぞ。何処にてか物食ふ」など問ひければ、「かく便りなき人は、師取りもいかにしてかし侍らん。物食ぶる所もなく、あはれと中人もなければ、仏の給はん物を食べて、仏を師と頼みたてまつりて候也」と答へければ、寺の僧ども集りて、「この事、いと不便のこと也、寺のために大事なり。観音をかこち申人にこそあめれ。これ集りて養ひて候はせん」とて、かはるぐ物を食はせければ、持て来たる物を食ひつ、御前に立ち去らず候ける程に、三七日になりにけり。

三七日の果てて明けんずる夜の夢に、…(中略)…と見て、

起きて、「あれ」と言ひける僧のもとに寄りて、物うち食ひて、かく蓑かけて、まかり出でける程に、大門につまづきて、うつぶしに倒れにけり。
(下の五八)

【例15】 物を食ふく、ありつる柑子を、「何にならんずらか。観音導かせ給ことなれば、よも空しくてはやまじ」と思ひだる程に、白くよき布犬二疋取り出でて、「これ、あの男に取る程に、白くよき布犬二疋取り出でて、「これ、あの男に取らせよ。この柑子の喜びは、言ひ尽くすべき方もなければ、かゝる旌にては、嬉しと思ふばかりの事はいかぐはせむずる。これはたぐ心ざしの初めを見する也。京のおはしまし所はそこそこになんをします。かならず参れ。この柑子の代りの物は賜はんずるぞ」と言ひて、布三疋を取らせれば、喜びて、布を取りて、「菓筋一つが布三疋になりぬること」と思ひて、脇に挟みてまかる程に、その日は暮れにけり。
道面なる人の家に泊りて、明けぬれば、鶏とともに起きて行く程に、…
(下の五八)

これらはいずれも「にけり」の後統段落の冒頭に時間の経過を示す表現があり、展開部の場面の切れ目に用いている。ここで注意すべきは例14・例15の五八話の例では「にけり」で終わる文は会話部分を含む長大な一文であり、それを一場面として纏める表現になっている点である。先に挙げた例4も終局部の「参りにけり」で終わる

文が長い一文であり、「にけり」は一場面を一文で纏める例が見られる。この類例は、次のように「てけり」にも見られる。

【例16】 多気の大夫、つれづれにおほゆれば、聴聞に参りたりけるに、御簾を風の吹き上げたるに、なべてならずうつくしき人の、紅の単襲ね着たるを見るより、「この人を妻にせばや」と、いりもみ思ければ、その家の土童を語らひて問ひ聞けば、「大姫御前の、紅は奉りたる」と語りければ、それに語らひつきて、「我に盗ませよ」と言ふに、「思ひかけず。えせじ」と言ひければ、「さは、せの乳母を知らせよ」と言ひければ、「せれはさも申てむ」とて知らせてけり。さて、いみじく語らひて、金百両取らせなどして、「この姫君を盗ませよ」と責め言ひければ、さるべき契にや有けむ、盗ませてけり。

やがて、乳母うち具して、常陸へ急ぎ下りにけり。…

(上の二〇)

「知らせてけり」の文は、会話を含む一場面の長い描写であり、その纏めに「てけり」があり、「さて」を介し「盗ませてけり」の文に繋ぎ、「やがて」を介し次段落の「下りにけり」に繋いでいる。「てけり」を含む文は、各々が独立性のある一場面と解される。

このように見ると、終局部に「にけり」を用いた例1・2・4と

展開部の一場面を纏めた「にけり」の例13・14・15・16は、内容の纏まりを作る点で連続的と言える。前節で検討した係り結び・連体形終止文には、このような長文の一場面を纏める用法は認められない。それに対し「にけり」が特に段落末尾や終局部に用例が多いのは、内容を纏める機能があることを示唆している。「にけり」に含まれる「ぬ」について鈴木泰（一九九九）西田隆政（一九九九）が文章機能を検討し、いわゆる場面起こし、場面閉じの機能を指摘している。これと枠づけの機能を持つ「けり」が合わり、文章の枠を作る機能が生じる。また、拙稿（二〇一一）で、今昔物語集では事件の終結を意味する慣用句「止みにけり」が多いことを述べたが、古本説話集でも第五話（終局部）と第六五話（展開部段落末尾）に例がある。「止みにけり」を始め段落末尾や終局部で「にけり」が多いのは、内容を纏める終結機能を發揮しやすい「にけり」の特徴に関わると考えられよう。

六 おわりに

本稿では、古本説話集の「けり」のテキスト機能について分析した。その結果、展開部に文中の「ける」「けれ」を多く含む説話が多いが、終局部の文末には、文章の流れを切る係り結び・連体形終止文や、文章を纏める機能を持つ「にけり」「てけり」などを用い

枠構造を作る傾向が特徴的に認められた。この傾向は、宇治拾遺物語や今昔本朝世俗部と近いものである。

文章の切れ目を作る諸形式の中でも、特に「にけり」が今昔物語集や宇治拾遺物語と同様に多くの例が見られたことは注目される。場面や話を纏めつつ終結させる特徴を持つ表現として、「にけり」が重要な表現であることが明らかになってきた。

本稿で指摘した「けり」「にけり」「てけり」などのテキスト機能について、さらに中古・中世の物語・説話の諸作品の用法を広く探っていく必要がある。また、文末表現に用いられるアスペクト表現である「ぬ」「つ」や「たり」「り」がどのようなテキスト機能を持っているのかについて考えることも、今後の重要な課題である。

注

- ① 拙稿(二〇一二)で指摘している。
- ② 拙稿(二〇一一)および拙稿(二〇一二)で指摘している。
- ③ 小松英雄(二〇〇二)は、接続詞が未発達時代において係り結びは「コデ切ルヨと予告してデイスコースの途中に断続を作り、その展開にメリハリをつける」とし、「係助詞ゾが、ヒトマズ、コデ切ルヨ、という予告であるのに対して、係助詞ナムの機能は、コデ大キクキルヨ、という予告である。したがって、そのあとは、話題が転換するか、短い補足がそれに続くか、さもなければ、そこでデイスコースが途切れている。」とする。ただし、ゾとナムの切る度合いの差は、本作品で明

確には読み取れなかった。

参考文献

- 小松英雄(二〇〇二)『日本語の歴史 青信号はなぜアオなのか』(笠間書院)
- 鈴木泰(一九九九)『改訂版 古代日本語動詞のテンス・アスペクト——源氏物語の分析——』(ひつじ書房)
- 西田隆政(一九九九)『源氏物語における助動詞「ぬ」の文末用法——場面起こしと場面閉じをめぐって——』(『文学史研究』40)
- 拙稿(二〇一〇)『今昔物語集の「けり」のテキスト機能——冒頭段落における文体的変異について——』(『古典語研究の焦点』武蔵野書院)
- 拙稿(二〇一一)『今昔物語集の「けり」のテキスト機能(統)——終結機能を中心に——』(『国語国文』第八十卷第十号 二〇一一)
- 拙稿(二〇一二)『宇治拾遺物語の「けり」のテキスト機能——今昔物語集・古事談との比較——』(『同志社国文学』第76号)